

北海道総合福祉研究センターニュース No.45

2025.1.1

巻 頭 言

『一富士、二鷹、三茄子』の初夢

理事長 五十嵐教行

私たちは縁起物が好きな生き物だと思う。縁起が良いものを好み、縁起が悪いものを遠ざけようとする。だから新しい年を迎えるに当たって縁起を担ぎたくなる。

そこであらためて考えたい。そもそも「縁起」とは何なのか。縁起とは、仏教用語の「いんねんしょうき因縁生起」の略語で、すべてのものには必ずそれを生んだ因と縁とがあり、それらが複雑に影響しあって、持ちつ持たれつの状態をつくっているという意味である。つまり、あらゆるものの力や恵みなどを受けて、私たちは生かされているということになるわけだから、仏教では、縁起についての「良い／悪い」という判断はしないという。

しかしだ。それでも、私たちは幸運を招きたいと願い、縁起を担ぎたくなるのである。そして、ひたすらに吉兆のきざしを探すのだ。たしかに、縁起の悪い物や事を避けて縁起の良い物や事を選ぶ気持ちは純粹かもしれないが、自分にとって都合の良い物や事ばかりを選び取ろうとするとところに人間の業の深さがあるとも感じられる。

さて、新年である。新年の縁起と言えば、やはり初夢だろう。「一富士、二鷹、三茄子」だ。これらには理由がある。

富士は、「不死」とか「無事」という言葉にかけられているし、山の形から「末広がり」の意味も込められている。鷹は、鳥の中の王として威厳ある存在であるということと「高い」という言葉にかかっている。茄子は、物事の生成や発展する様子を示す「成す」という言葉にかかっている。

実は茄子の後に「しおうぎ四扇、こたばこ五煙草、ろくぎとう六座頭」という続きがある。扇は、末広がりの形から商売繁盛や子孫の繁栄を願う意味が込められている。煙草は、煙が立ち昇る様子から幸運や運気の上昇を象徴しているという意味が込められている。座頭は、琵琶法師の座に所属する盲目の演奏家のことで、剃髪していることが特徴だ。彼らの頭には毛がなく、そこから「怪我無い」として家内安全を願う象徴とされてきたのである（筆者もスキンヘッドだから、誰かに家内安全を願う象徴として見られているのだろうか）。

このように、「一富士、二鷹、三茄子、四扇、五煙草、六座頭」には、すべて「繁栄」や「めでたさ」、「安全」などに関連する要素が含まれている。古来より人々はこれらの幸運を願う言葉に、おめでたくて幸せなイメージを重ねてながら、21世紀へと脈々と長く受け継がれて来たわけである。

私事で恐縮だが、かつて筆者は恐ろしい初夢を見たことがある。その夢の内容は、敵の組織から追われ、そして彼らに捕らえられた後、すさまじい拷問を受けるのだが、最後まで口を割らなかったのだ。どうやら私は国家のとある組織のエージェントらしい。なぜそういう夢を見たのか。スパイ映画の見過ぎだろうと思うのだが、はたしてこの夢は縁起が良いのか悪いのか、どうなのでしょう。そもそも縁起と関係あるかなあ、あるわけないか。

「大丈夫か！？国試！」

毎年実施される社会福祉士国家試験ですが、出題される事例問題をみていくと、私たちの感覚から少しズレているように感じられる事例の内容や若干の違和感を感じる文章表現があったりします。あくまでも筆者個人の感想ですが、紹介いたします。

第35回 問題94

事例を読んで、Z障害者支援施設のF生活支援員(社会福祉士)がこの時点で行う支援方針の見直しに関する次の記述のうち、最も適切なものを1つ選びなさい。

〔事 例〕

正解 3

知的障害のあるGさん(35歳)は、日頃から言語的コミュニケーションは難しいところがあるが、Z障害者支援施設から離れた場所にある生家に一時外泊を行った。Gさんが施設に戻った際に、Gさんの家族から、外泊中の様子を伝えられた。自分から気に入った場所に遊びに出掛けたり、簡単な食事は自分で用意したりしていたとのことであった。F生活支援員にとっては、施設ではこれまで見掛けたことのなかったGさんの様子であった。

1. Gさんの支援は、施設と自宅では環境が異なるため、施設の事情や制約に合わせた支援を行うことを再確認する。
2. Gさんの施設での生活では、職員が考えるGさんの最善の利益に関する事柄を優先的に取り入れる。
3. Gさんの興味が広がるよう、Gさんの理解力や意思決定の力を考慮して、思いや選好を確認するよう努める。
4. 家族から聞いた話を基に、Gさんの支援に、自立に向けたプログラムとして施設内で実施している料理教室への参加を組み入れる。
5. Gさんの短期的な支援目標を、施設に近接する共同生活援助（グループホーム）への移行に改める。

■筆者の感想

事例紹介の最初の1文に違和感を感じるのだ。この1文は、Gさんの言語的コミュニケーションにおける困難性の説明と一時外泊の説明から成り立っている。

まずは、接続助詞の「が」の使い方だ。「日頃から言語的コミュニケーションは難しいところがあるが、」とくれば、てっきり何かしらのコミュニケーションが通じたという話題になるのかと思いきや、「Z障害者支援施設から離れた場所にある生家に一時外泊を行った」と続く。まったく関係性のない2文を1文でつなげているのだ。残念ながら、「が」を逆接以外で使うと読み手を混乱させてしまう。さぞかし、受験生も意味をつかむのに時間を要し、そして困惑したことだろう。

次に、文中に出てくる「生家」である。「生家」の文字を見て、かつて筆者が太宰治の生家である旧・津島家住宅を訪れたことを思い出した。筆者にとって「生家」とは、偉人が生まれた家という意味合いが強いので、事例に出てくるGさんは実は偉人なのかと感じたほどだ。はたして、「生家」というコトバを日頃から使っている人を筆者は知らない。ちなみに、「生家」とは主に「建物(house)」を示し、「実家」は「家庭、家族(home)」の意味で使われる。なぜ「生家」というコトバを使ったのだろう？問題作成者の意図を教えてくださいと心から思う。

「ヘー、そうだったのか！」シリーズ

第5回 「『もったいない』の語源」

「もったいない」とは、「物の価値を十分に生かしきれていなくて、無駄になっている」状態やそのような状態にしてしまうような行為を戒めるという意味で私たちは使っています。この言葉が一躍注目を浴びたのは、次の出来事があったからです。それは、アフリカの女性として初のノーベル平和賞を受賞したマータイさんが来日（2005 年）した時に「もったいない」という日本語を知り、この言葉を環境を守る世界の共通語にしようと提唱してくれたことがあったからです。「もったいない」という言葉は、他の言語では単純に置き換えられず、「MOTTAINAI」として世界に広げてくれました。この話題は当時のマスコミが大きく取り上げましたので、ご存知な人も多いでしょう。

さて、この「もったいない」は、「もったい」と「ない」の2語からできています。「もったい」は「勿体」と書き、室町時代から使われ始めたと言われています。「勿」という漢字は、「物」の略字です。元々は「物体」と表記され、「物の本来あるべき姿や形」という意味で使われておりました。「もったいない」とは、その「勿体」に「無い」という否定語をプラスすることで、物の本質を無しとしたわけです。

また、この「もったいない」には、仏教用語の「物体（もったい）」を否定する語としてあり、ものが持つ本来の価値をなくしてしまうことを惜しみ、嘆く気持ちを表しているという説もあります。

私たちの生活全般を見渡してみます。たとえば、料理は全て食べることが本来のあるべき姿ですが、食べ残さないようにと思っても残してしまうことがあります。筆者の書斎にはたくさんの万年筆があります。気に入った万年筆を見つけては購入してきましたが、それらの多くは使っていません。大きな箱に放り込んであります。使うことが本来のあるべき姿なのに、まるで持っていることが目的になったかのような気がします。洋服も着るのが本来の姿ですが、タンスの中で眠ってはいないでしょうか？

本来、日本人には物に対する尊敬や感謝の気持ちがあり、そのものの価値がなくなるまで使い切らなければ、「もったいないよ」と教えられてきました。このような思想にぴったりと当てはまる言葉は外国語ではなく、日本だけに存在する言葉です。

ところで、「もったいない」の反対語について調べてみました。いろいろありましたが、ベタな反対語が有名です。それは「もったいなくない」です。口にした人は多いでしょう。その他を紹介します。「物惜しみしない」「惜しくない」「必要ない」「捨てちゃいなさい」「無駄遣い」「ケチケチしない」「セコセコしない」「金に糸目はつけない」「ムダ遣い」「浪費」「太っ腹」「気前よく！」「贅を尽くす」などです。

あらためて、この言葉が使われ始めた室町時代を考えると、物が少なく、大切に扱っていたことがわかります。今で言うリサイクルが徹底された社会と言えます。例えば、着物は何度も糸をほどいて普段着として再利用し、最後は布巾や雑巾、赤ちゃんのおしめとしても有効活用されました。

650 年以上も前に誕生した「もったいない」に込められたムダにせずを使い切るという思想は、これからも大切にしたいものです。

「ラジオ番組の終了」のおしらせ

2005 年 10 月 22 日から始めたコミュニティ FM さっぽろ村ラジオ『とびっきりの福祉～こんな話があったんだ』(五十嵐教行がパーソナリティ)の番組を 2025 年 12 月 28 日で終了いたしました。毎週土曜日の午前 11 時から 11 時 58 分(途中から 11 時 57 分に変更)までの約 1 時間番組でした。およそ 19 年と 2 ヶ月、全 930 回の放送でした。

社会福祉の専門家として世の中の様々な出来事に対して、社会福祉の視点からの分析と提言をしてきました。放送が土曜日のお昼前の時間なので、主なリスナーの対象者を 40 代から 50 代の主婦として絞り、彼女たちが直面するだろう問題を掘り下げてきました。この年代の女性たちは、①実親と舅姑の介護、②夫の定年、③思春期を迎えた子どもとの関わり方、④自身の心身の変化などの多くの問題に向き合うことになります。これらの問題はまさに社会福祉で取り組むべき問題のほぼ全てとなります。

長きにわたって応援して下さいましたみなさまに心より感謝申し上げます。

【北海道総合福祉研究センター会員登録をお願いいたします】

北海道総合福祉研究センターは、特定非営利活動法人として活動しています。この法人は、社会的活動の内容に賛同してくださる皆様からの会費収入と事業収入により運営いたしております。

そこで、当センターの活動主旨にご賛同いただける皆様に、正会員(個人)および賛助会員(企業・団体)のご登録をお願いいたします。

会員の皆様には、会報「北海道総合福祉研究センターニュース」や毎月発行する「おもしろハガキ」、当センター主催の各種研修・講座等のご案内をお送りいたします。理事長の五十嵐は、「傾聴」についての研究と実践活動も行っております。自分のからまった思いなど、誰かに話をしたらラクになるという体験を多くの人は持っています。ところが、いつの間にか、話のできる相手がなくなっていることに気づき、孤独感を感じるときもあります。そういうとき、どうぞ理事長の五十嵐の傾聴を利用してください。どういう話でも、しっかり聴きます。一度お電話してみてください。お応えできると思います。

- (1) 正会員 (個人) 年会費 4,000円
(2) 賛助会員 (企業・団体) 年会費 10,000円(1口)
※ 年会費のお支払いは、次のいずれかにお振り込みください。
北海道銀行 白石支店 普通口座 0803475
北洋銀行 北郷支店 普通口座 0665741
郵便振替 口座番号 02770-1-60492

【編集後記】

有料老人ホームの施設長として働き始めて2年が過ぎた。職場の理解が得られて、当センターの理事長としての業務も行うこともでき、ありがたいことだと感じている。世の中には「2足のわらじ」どころか「3足のわらじ」を履いている人もたくさんいる。うまくこなしている人は、やはり人間関係を良好に保つ努力をしているのだろかなあと思う。筆者もそれらを見習って取り組みたいと思う。

ところで、前回の編集後記で「父親の棺桶にみんなで寄せ書きをした」と書いたが、棺桶に直に書いたのか?という質問を複数受けた。改めてお答える。直に書いてもらった。油性ペンで。(五)

発行日 2025年1月1日
発行者 五十嵐 教行
発行 特定非営利活動法人 北海道総合福祉研究センター
〒003-0028 札幌市白石区平和通2丁目南6-23-210
電話 090-8638-7264
FAX 011-595-7400
E-Mail hsfkc@minos.ocn.ne.jp
ホームページ <http://www.hsfkc.org>